

放課後のミケ

模sing

憂鬱な水曜日

3日前、ミケが死んだー

帰ってくると白い布に覆われたミケがいた。

医者は寿命だと言っていた。

...でも、今のわたしにはそんなことは関係なくてただただ悲しくて涙が止まらなかった。

ミケは我が家で飼っている猫のことだ。わたしが3歳の時にうちに来た。白い毛の所々に茶色やこげ茶のぶちがある三毛猫で元は私の祖母の家で飼われていた飼い猫だった。しかし、祖母が病気を患い亡くなって家で引き取ることにしたのだった。わたしは当初この三毛猫に「マロン」とか「マリー」とか可愛い名前を付けようと考えていた。でも、祖母はどうもこの猫を“ミケ”と呼んでいたようでミケ以外では呼んでも鳴くどころかそっぽををむいて真っ向から無視されてしまい相手にもしてくれないので諦めてミケと呼ぶことにした。

ミケは決して愛想のいい猫ではなかった。細身でちょっと憎たらしい顔をしていて時折鼻ですかしたような鳴き声をあげる。でも自分が物心つく前からいつも傍らにいた大事な家族であり、同じように年を重ねた姉弟のようだった。

でも、そんなミケは本当は私が思っているよりもずっとおじいさんだったー

動物は人間の何倍も速く年をとる。知ってはいたけれどわたし自身実感はなくてミケが亡くなって今やっとミケが私の何倍も何十倍も老いていたことに気がついた。

あのふさふさしたお日様の匂いがする毛や無愛想なでも凜とした目、目の下にある黒のほくろのようなぶちや...思い出せば思いたすほどミケの体温がまだこの両手に確かに感じられて、感触が忘れられなくて1晩泣き続け、翌日はお葬式をあげるために学校も休んだ。とても学校なんていけなかった。

「行ってくるよ～ミケ～」

頬をすりよせると嫌そうにニャーと鳴くミケ。これがいつもの朝の光景。もうそれもなしなのだ。

「元気ないなあー佳菜、何かあった？」

「うん。ちょっとね・・・」

水曜日、2日ぶりに学校に行った。今日からミケには写真越しに挨拶をするようになった。

友人たちは心配して親身に聴いてくれたが、大事な者を失くしたこの気持ちは同じ経験をした人

にしかわからない。きっと。

でも、少し心が軽くなった。

“話せば楽になる”は案外嘘ではないのかもしれない。それに茶道がわたしを支えてくれたから。

「浅葱ちゃん、具合でも悪かったの？お休みしてたんだって？」

顧問の結城先生や部活の子から心配されたり、慰められたり、お茶をたてたり...少しずつ心に溜まった黒い塊が氷みたいに溶けて小さくなっていく。

「佳菜、おいでっ！」

そうやってハグしてくれる友達もいた。ホントに悲しくて嬉しくてちょっぴり涙が出た。

部活をやっててよかった。友達がいてよかった。学校行ってよかった。

家にはミケの匂いが染みついてて否が応でも思い出される。涙ばかりでてくる。

「話し込み過ぎたかな・・・」

外はもうかなり低いところまで太陽が落ちていた。まだ7月だからいつまでも太陽が沈まないことをいいことに部室に入り浸ってしまった。お茶をたてて先生が買ってきたお菓子をいただいてみんなに慰めてもらってそんなことをしていたらいつも乗る電車はもうとっくに駅を出ていた。

「次の電車まであと30分か...」

駅へと続く一本道をゆっくり下っていく。途中の横道から男子校生の集団がちらほら見える。

(部活終わりかなあー...)

集団のなかには大きなスポーツバックやタオルを首に提げた学生も多い。たぶん、坂の途中の島倉高校の生徒だろう。毎朝、駅や坂で見かける。この駅で降りるといったら白女か島校ぐらいだ。いつもは友達と帰るこのゆるやかな坂も一人で帰るとなんだか淋しい気持ちになった。まだ街灯はついてなくて少し薄暗い。

駅に着くとホームにはちらほら学生がたむろしていた。

私はそっちとは逆の先頭車両よりのホームのベンチの腰かけた。

少し、ため息を吐く。

(あの猫、ミケに似てたなあー)

すぐに頭を振って切り換える。

ミケ死んで3日もたったというのに私の頭の中のミケは鮮明だ。

今日なんて体育の時間にグラウンドで見つけた猫に思わず抱きついてしまった。ホントにミケだと思った。でも、そんなことあるはずがなくて、その猫は飛びのいて逃げてしまった。全然ミケに似てなんかいなかった。でも、猫を見ると全部ミケに見える。悲しい時怒りたい時いつも私のを聞いてくれたミケにみえてくる。

わかっているはずなのに・・・自分でもしょうがない奴だと思った。

ホームに電車が入るー

電車はすでにおおかた埋まっていて私はドアに近い壁に背を預けた。窓の外がグラデーショ

になっている。電車は3分この島倉大鳥居駅で止まる。車内は学生の汗のにおいと喋り声で充満していた。

(そろそろかな...)

車掌がホームを確認し始める。笛が鳴る。

(あっ・・・)

ドアが閉まる寸前で目の前のドアから人が飛びこんできた。

寸前でドアが閉まる。電車ががたり、と揺れる。

私はしばらく入ってきた学生をみていた。

息一つ乱さず、軽やかに入ってきた。大きなヘッドフォンをつけた髪をふわりと揺らして。

制服は黒に深緑のチェック、島倉高校だとすぐに分かった。

(...運動部ってわけじゃないなあ)

肩には通学カバンだけでスポーツバックなんかは見当たらない。

気だるそうに隙間を見つけて寄りかかる。

ここの店では観たことないようなおしゃれなクリーム色の大きなヘッドフォンをして彼は私とは反対のドアから外を見ていた。

私もなんとかなしに気づいたら彼を観察していた。

色の白い肌、茶色の頭に時折こげ茶の髪がのぞく頭、そして目。

見れば見るほどなんだかミケに似てるような気がしてきた。

もちろん相手は人間だ。ミケのように猫じゃない。でも雰囲気はどことなく似ていた。

私は電車で揺られながら彼の顔を見ていた。気付かれないようにそっと。

一次はあ～日の海い～日の海い～

車内にアナウンスが響く。肩にかけていた通学バックをかけ直して出口の前に立つ。

一ご乗車あ～ありがとうございましたー

アナウンスと同時にドアが開いて外に弾かれる。乗っていた乗客が波のように階段に向かって歩いて行く。その人混みを掻きわけて発射する電車を見送る。

彼は相変わらず外を見ていた。

(ミケ...)

思うのは自由だ。一人呟いてホームを抜ける電車を見送った。

また会いたい。そう思いながら長い階段を下りて行った。

